



# すたぢ

徳島大学附属図書館報 No.44

1991.10

## 目次

〈巻頭言〉 一つの読書論 ..... 1	21世紀へ向けての 図書館の整備 ..... 13
新しい展望を意識しつつ、 そしていま ..... 3	〔図書館情報〕
〈私の研究 シリーズ3〉 ..... 4	附属図書館の新しい サービスについて ..... 14
〈エッセイ〉	学術雑誌総合目録 ..... 15
“図書館”と“読書” ..... 6	会 議 ..... 16
外国図書館事情—利用者から見た ロンドン大学の図書館— ..... 7	本学教官著作寄贈図書 ..... 16
“LIBRARY” ..... 8	人事往来 ..... 17
私の薦める一冊の本 ..... 8	1992年版新規購読及び購読中止 学術雑誌等一覧 ..... 18
一冊の本「自然科学と人間教育」 ..... 9	図書館（本館）の施設・設備等の 利用について ..... 26
私の一冊 ..... 10	
私の図書館の利用方法 ..... 11	
ニューメディア私の利用法 —使えて使えなくて ..... 12	

### 【巻頭言】

## 『一つの読書論』

後 藤 健 次

古い本の話で恐縮ですが、先日図書館から借り出してきた、1921年出版のニーチェ全集の一冊を見ていた際に、小さな鉛筆の目印に気がきました。確かに誰かがここを読んで何らかの衝動を受けたことが明らかで、私自身も即座に共感を覚えた箇所なのです。しかも、その他には一切の本の破損が見られませんでした。この本は、昭和29年11月という購入月日が登録されていました。つまり、30数年の間には、難解をもって知られるこのような書物も、しかも、純粋な文科系の学部をもたないわが徳島大学にも、誰かがこの本に関心をもって読んだと考えられます。ニーチェという非常に有名な思想家の著作でありますから、誰かが読んでいたとしても当然と言えば当然かもしれませんが、図書館の本は誰かが必ず読んでいと伝説のように言われることが、実際にあるのだという事例に接して、ある種の感慨を禁じ得ませんでした。つまり、図書館というものは、こういう誰かのために存在するのではないか、と言えるのかもしれない。もっとも本に傷をつけること

は、図書館としては歓迎できないのは勿論です。

ここで私は、彼の名前が出たことで、このニーチェが次のように述べているのを思い出します。

すべての書かれたもののうち、わたしはただ、血をもって書かれたもののみを愛する。血をもって書け。そうしてこそ、君は血が精神であることを知るだろう。

他人の血を理解するとは、容易にできることではない。わたしは、暇潰しに読書するといった手合いを憎む。

書物というものは、今日多くの政治家が自伝を書き（あるいは書かせ）、タレントたちがいかにも軽々とお金になる本を書くように、誰でもが書くべきものではない、とニーチェは言っているのでしょう。今日流に言えば、誰にせよ自分が持っている情報は自由に発表できるはずのものであり、このニーチェの言葉は時代遅れも甚だしい、と言えるかもしれません。この言葉は、誰でもが同じ権利を持つという民主主義的平等の精神に反対するニーチェの貴族主義、天才の特権を過度に誇張する超人の思想を表わしている、と言えるのかもしれませんが。しかしまたこれは、思想というものは頭の中だけの、熱い血と肉体を持たないこしらえものであってはならない、という彼の根本思想から出たものであり、この点では大いに私たちの共感を促します。そしてそういう本当の意味での書物をどう読むべきかを、ショーペンハウアーが次のように強調しております。すなわち、書物は他人の思想の陳列所であり、それを暇潰しに読むだけでは何ら自分に役立たないということ、むしろそのような読み方では、読めば読むほど百害があると断言しているわけで、その烈しい口調にはびっくりさせられるのであります。要するに他人の思想を自らが考えながら読むこと、すなわち、読者も書き手と同じように自分の血と肉体で読むことが大切だということでありましょう。もちろんすべての書き手に対して、このような読み方がされるわけのものではないでしょう。これは読書の原則を述べたもの、と考えるのが妥当なことでありましょう。そして私たちがこういう意見に共感を覚えるということは、私たちも読書とは本来そうあるべきだと思っているからなのでしょう。

今日私たちは、情報化社会に生きてるとよく言われます。この情報という、新しいような、あるいはすでに言い古されたような言葉は、何かしら私に違和感を与えます。一般的には情報とは、伝達される知識であろうと思われませんが、違和感とはこれが遺伝子情報などという使われ方をするとあるようです。語源的には、インフォメーションとは、形作る、ということのようです。したがって私の解釈では、情報という言葉は本来人間形成、つまりドイツ語でいうビルドゥング（教養）と深く関わり合っているのではないかと、思われます。それはともかくも、今やわが徳島大学附属図書館は蔵書数60万冊に到達しようとし、和洋の雑誌は約1万種類に及ぶ膨大な情報源を抱えております。確かに私たちは必要な情報を、すばやく、多量に、正確に獲得したいと願うのでありますが、日々の要求を満たすこれらの情報のみでは、心の底にある、人間的に生きるための精神的な糧への必要が満たされ得ないのではないかと恐れるわけです。それは、一冊の本が30数年間にはほんの二、三の人にしか読まれなかったという非能率的な事実となって現われる程度のものかも知れませんが、日々の要求と同じく切実なものであるはずで、また、血と肉体でもって読むという読み方も、まったく非現実的なやり方のように思えますが、やはりこれこそが血と肉体をもった私たちの本来の書物への接し方と言えるものであります。ふたたびニーチェの言葉を借りれば、上の引用に続いて、

血で箴言を書く者は、読まれることではなく、暗（そら）んじられることを欲する。

ということになります。

わが徳島大学附属図書館の保有する資料は、今後も充実の一途をたどるであろうと思われ、そして、それらの宝庫の能率的な利用については、すみやかな電算化、あるいは資料の集中化とい

うような問題が緊急に解決されねばなりません。それには、すべての大学教職員のご協力と、図書館関係者の一層の努力が必要とされるわけです。しかし、一方で上に述べたような、自分の生活を楽しむような読書の要求にも図書館は応えられなければならないのではないかと私は思います。

( 附属図書館長 )

## 『新しい展望を意識しつつ、そしていま』

杉 尾 勝 茂

大学審議会の答申「大学教育の改善について」(平成3.2)は教育研究のあり方について改革を求め、また大学図書館においても変革の新たな視点から同様に改善を求めています。

大学図書館をめぐる環境は1980年代から急速な変貌をとげています。情報化時代から高度情報時代への幕明けといわれ、情報が電子的に生産・加工・表現・伝達・保管が可能な時代的背景から、学術審議会は「今後における学術情報システムの在り方について」〔1980.(昭55)〕を答申し、将来を展望した学術情報システムの整備について提言しています。その根幹をなすものは学術情報センター(昭61.4発足)を中心に学術情報をコンピュータとデータ通信網を結合し学術情報を迅速・的確に提供するシステムの確立であります。

さらに今日までの整備状況から学術審議会学術情報資料分科会学術情報部会は「学術情報流通の拡大方策について」〔1990.1(平成2.1)〕学術情報ネットワークの整備、キャンパスネットワーク(学内LAN)の整備、データベースの作成・提供の実現、大学図書館間複写サービスシステムの確立、電子図書館システムの開発・導入を内容とする学術情報流通の基盤整備と大学図書館の新たな整備を提言しています。

これらの提言・施策から大学図書館はダイナミックに変動し発展をとげてきています。国立大学図書館においてはコンピュータの導入館並びに学術情報センター接続館は完成の域にあり、全国的な学術情報総合目録データベースの形成に参画しています。全国の国公立大学図書館に所蔵する図書情報は所蔵レコード件数で500万件を、雑誌情報18万件を突破しています。本学においても、平成2年度からこの事業に参加し、貢献の一端を担っています。必要とする学術情報が図書館、研究室から所在情報と電子的手段によって確認することを可能とするシステムが着実に進められています。

今日の学術研究は学際化・個別化が一層進行する研究態様から生産される学術情報は、電子的に編集・出版される状況下から情報量は増大し加速されています。これらの情報は自らの大学において保有することは困難な状況にあります。学術情報システムは学術情報「資源の共有」の思想が底流にあり、資源がどこに所在しようと利用者の求めに応じ迅速に提供される、あるいは提供するシステムの上に確立されることは言うまでもありません。従前から図書館間相互利用のシステムがその機能を果たしてきましたが、新たにこのシステムを学術情報ネットワーク上に電子的手段によって実現させる試行が本年11月から開始され、来年4月には本稼働に向け整備が進められます。学術情報の検索手段と取得手段の整備の統合であり学術情報システムを前進させる整備であります。

このような大学の全国的な動向から本学図書館の到達状況と今後の課題について、赴任して間もない、そしてまた状況を十分に把握し得ていないことをご容赦して戴くことを前提として列挙しますと、一つには学術情報資源の集中化であります。所属する大学で学術情報資源が補完できない状況から育成された資源共有の思想は、提供する、提供を受けるの関係であり、その大学における資源の集中化によってその迅速性が保障されます。本学の場合、購入学術雑誌の集中化率は生命科学分野が集中する蔵本分館は49%、分野を異にする常三島本館では2%であり、残りの98%は100カ所以

上に分置されているという実態であります。この課題は容易なことではないが、今後において避けられない課題でしょう。二つには学生用図書の実態であります。「大学教育の改善について」答申にありますように快適な学習環境を確保すること、学生の学習意欲の向上を図ることを求めています。文部省からの学生用図書費に加え本学として学内施設充実費、学部からの協力費により学習資料の充実に務めているところですが、しかし充分とはいえません。本学図書館報“すだち”No.43最新号は新入生向けに図書館利用法を特集したものです。寄稿文の一つに学生が利用したい資料を実際に「手にする」まで、いかに時間・労力・お金を必要とするかその心構えを述べています。資料探索のための学究の卵子への心構えか、また本学に所在しても利用できないための予めの心構えか。おそらく後者の方でしょう。図書館に対する強烈的な改善の要望として受けとめています。先に記した研究図書館機能と学習図書館機能をもつ図書館運営が大きな課題といえましょう。三つには土曜閉館に伴う図書館のあり方であります。大学教育改善についてと大学設置基準の改正にもありますように教室外学習の保障を確保するうえで、また、生涯学習・地域社会への貢献などの視点からみて、図書館の土曜開館を大学としてどのような対応を考えるか差し当たりの課題であるといえます。そのほかには電子メディアの導入・外国人留学生に対する図書館の対応、図書館業務電算化の推進と本学学術情報資源の遡及入力等々課題が山積しています。

最近“21世紀の・・・”という言葉をよく耳にします。或る人は21世紀を20世紀にその原型を垣間見せるといいます。本学附属図書館の事務部制の発足とあわせ、館員一同新しい時代への展望を意識しつつ改善に務めたいと思っています。ご協力ご指導をお願い申し上げます。

(附属図書館 事務部長)

## 【私の研究 シリーズ③】

# 『私 の 研 究』

三 村 康 男

臨床系講座は基礎的研究も多いが、臨床を主体とする研究も重要である。

基礎的研究では実験条件を設定し、できるだけ変数を少なくして行うことができる。昨今、ある種の薬剤効果判定でも患者の同意をえなければならず、患者の方では、治療費が少なくすむ点は歓迎ののだが、実験台にされているのではないかと反論する人も少なくはない。我々の領域では外眼部疾患に対して、各種の点眼剤が使用されるが、厳密な条件設定のもとに2重盲検群間試験などが行われ、日の目みた薬剤である。

自然治癒傾向の高い疾患や薬剤によく反応する疾患はよい。難病と指定された疾患となると、治験を含め、患者の指導が大変である。筆者は大阪大学在籍中から厚生省特定疾患ペーチェット病調査研究班で病因、病態、治療を担当してきた。自験例は1,000人以上である。徳島へ移ってから毎月平均30名の患者が通院している。ペーチェット病につきあってから20年になるうとしている。その間、苦労をした点、今なお既発表した成績に自分自身疑問をもっていることもある。紙数が限られているので、2～3の問題点につき触れてみよう。

患者統計 大阪大学在籍中は昭和45年頃から平均年20名の新患があった。5年程の患者を性別、年齢別など簡単な統計をとってみると、男性に多く、発病時期は25～30歳台に多い結果をえた。一大学の統計など一般には通用しない。他科領域の先生に協力戴き、大阪府全域で患者統計をとることができた。人口10万人あたり5～6名の有病率であった。この比率は翌年行われた全

国調査でも近似の結果で、大阪府程度の母集団では、ほぼ正確な統計が可能なが分かった。この時、集計をしていて感じたことだが、眼発作を繰り返し急激に進行するものと眼に症状がでて軽く、短期間に治癒し視力低下も軽度な症例に経験上分けられることである。当時このようなことを指摘するものはなく、厚生省の研究班会議でも眼科学会でもひつこく力説した。2～3年後この領域の主な研究者はこの分類を取り上げてくれた。規定条件は割愛するが、ベーチェット病と言っても、男性で1/6、女性で1/3が属し、眼症状の欠くベーチェット病は皮膚科や内科を受診しているのが実状である。

視力予後について、的確な治療法もなくまた経過が長い。発病後5年を経過した患者でも、よりよい施設へと患者はおしよせる。視力がいつまで保たれるのか患者にとっては重要な関心事である。視力予後に関する統計報告はあった。しかし20例程度の、観察期間の短いものは評価できない。50例以上の報告でも、上述の病型分類がされていない。それでも、5年以上の経過で0.1未満に低下した眼は75%以上である。恐らく重症型が主体をしめていたと思われるが記載がない。筆者がしたことは、まず予後のよいと言われている病型眼は、その群だけで視力予後を調べた。予想通り95%が0.5以上の視力をたもっていた。そして進行型、または重症型とよぶ患者群のみで視力予後を調べた。問題なのは視力低下の時期である。患者各人の緩解期の最高視力をとり、発病期からの経年的に集計した。早く失明した患者は、その後来院しなくともその視力で通し、逆に1.0の視力で発病後5年目に来院した患者はそれまで良好な視力を維持していたとした。途中で眼発作時に来院したものは、病歴やそれまでの加療病院に問い合わせた。5年目までは、ほぼ満足できる結果が得られたが、6年以降となると集計はしたものの、7年目で少し改善するなど、常識では考えられないので、6～9年の予後として一括せざるをえなかった。白内障手術で改善した眼の取扱も苦労した。一応は他の報告と比較する必要があるので、統計から削除しているが、かなりの眼数になるので、このような眼を含めると視力予後はさらに改善しよう。

薬剤の効果について、有効とする報告は発作回数が少なくなった。視力が改善したことを根拠にせいぜい10例程度の報告である。難病が簡単になおるわけがない。視力については、眼発作期は視力が低下するのは当然で、かつベーチェット病の滲出斑は一過性速やかに改善するのが通常である。視力を指標にするなら、発作前の緩解期の視力以上に改善したとき初めて有効の1ポイントを稼げたと考えるべきであろう。発作回数も比較するなら、前年の同時期の発作回数がより説得力がある。というのは、季節の変わり目や冬季に発作が頻発する。二重盲検法ができればよい。しかし、この疾患では二重盲検法は非常に困難である。ちなみに、筆者がコルヒチンの効果を報告したときは、前年度1年の経過が観察できていること、少なくとも1年以上投与できた症例にかぎり、2年以上観察できた者を報告した。発作回数が1/4以下に低下したものを有効とした。単なる症例報告では、有効の根拠も少ないし殆どの薬剤が追試すると無効が多い。

検査結果について、IgDやフリーラデカル、リンパ球サブセットなどを統計処理してみると、殆どが高値を示すものと正常域に留まる群に分かれる。検定すると5%以下で有意差がでる。症例数を増やせば二頂分布を示すのかも知れない。検定には多くはT検定がつかわれているが、統計的に妥当なのか不明である。案外な盲点で、最近ではウィルコクソンの検定で悩まないことにしている。

図書館に関係ないことを記載した。少し、専門化し過ぎて読みづらい内容になったとおもっている。文献の読み方などにご参考にいただければ幸いです。

(医学部眼科学教授)

## 『“図書館”と“読書”』

荒木秀夫

図書館も情報化の時代の流れと共にその機能も変わりつつある。我々が学生のころ、古書独特の臭いが立ちこめる古めかしい図書館の中では、不思議と知的な探求心が掻き立てられたものだ。この臭いは古本屋の臭いでもある。大手の新書店が冷暖房完備、エレベーター付きであるのに対して、古本屋では扇風機と石油ストーブ、それに書棚を兼ねた狭い階段が通り相場であったが、いつも変わらないのが、あの臭いである。

読書は元来好きな方であったし、今でも東京へ出張の時は欠かさず神田の書店街に行く。学生時代は地下鉄“丸の内線”と“山の手線”を半年ずつ交互に通学路としていたが、“丸の内線”の時は“本郷三丁目”と“お茶の水”で降りて古本屋に寄り、“山の手線”の時は渋谷、新宿、高田の馬場そして池袋といったところが私の古本屋街であった。ここらで通った店は締めて11軒で、高田の馬場は10年以上も行ったことがないので分からないが、他の所は今も健在である。

池袋にT書店という古本屋があって、そこで出陣の「哲学以前」という本を買ったことがある。これは実におもしろく、感性の本質を考える上でこの上なく良い本であったという印象を持っている。それに加えて愉快だったのは、この1冊の本を購入したのは私が3人目であることが分かったことだ。この本の中に線が引っ張ってあって、原文に対する批評が書き込まれており、さらにその批評に対する別の筆跡による批評も書かれているではないか・・しかもいたるところに・・当然、私もそこに勝手なことを書き込むことにした。この本を私が古本屋に売っていたらどうなっただろうか、4人目の人が何かを書き込んだらどうか、今だったら汚なくて商品価値がないと言われて引き取ってもらえないかもしれないが・・。

私は図書館を多面的に利用する方ではない。仕事柄、もっぱら学術誌の資料点検、コピーといったことが主で、図書館では本来の書籍そのものに当たることはまれである。専門書といえば、実験系(運動生理学)である私は、結局のところ研究室で読むことになる。しかし雑誌の場合、最近では1つの専門分野でも100冊近い雑誌を検索するのが普通といった時代ともなると、雑誌の文献読みは図書館でということになる。図書館に入ると、やはりかつてとは違ってパソコンが目につくし、頻りにキーボードのタッチ音が聞こえて来る。私の学生時代とは大違いである。しかし、あの蔵本分館の雑誌書庫に入ると、それこそ私の脳髓に染み込んでいるあの臭い、あの足音といった昔の面影が漂ってくる。しかし、それも次第に変わっていくことだろうと思う。第一、あの分厚い製本雑誌自体が必要でなくなるだろうし、書架から下ろしたり載せたり、頁をめくる、コピーをする、製本するといったことまで、キーボード操作で事足りる・・そんな時代が遠くない将来に訪れる。

コンピューターのおかげで私も研究面では大変な恩恵を受けている。これからも図書館では大いシステムの拡充を図って、さらに充実させて欲しいと心底願っている。しかし、私個人の趣味としての読書、とくに教養に係わる読書については、いつまでも古本が中心になりそうだが・・。

(教養部保健体育助教授)

# 『外国図書館事情』

## —利用者から見たロンドン大学の図書館—

太田 房雄

英国の図書館システムについて特に勉強した訳ではないが、3年近く研究のためロンドンに滞在しその間ロンドン大学の図書館を利用した。日本の大学（徳島大学）の図書館の利用者として両国のシステムを比較してみたい。国内の大学図書館にしても徳島大学、島根医科大学及び近畿大学医学部の図書館を利用しただけなので、これらで全てを云々するのは適切ではないかも知れない。しかし、両国の大学図書館を比較することも、今後国内の大学における国際交流の観点から何かの役に立つと考える。

私は主として王立外科大学、クイーン・メリー大学およびロンドン病院医科大学の図書館を利用した。何れもロンドン大学の一部である。先ず第一に何れの図書館の建物も古く、日本のそれと比較にならない。そのために図書館の内部が迷路の様である。特に興味を引かれたのはロンドン病院医科大学の図書館で、建物が古い教会そのものである。祭壇が有効に利用され、日本では考えられない。私が比較的長期に利用した王立外科大学において、利用者として非常に良いと思った事が2～3ある。私はリサーチフェロウの身分であったので、所属講座の教授が自ら図書館に連れていってくれ登録をした。しかし、登録と言っても単に書類に記入、署名するのみでいわゆる図書カードなるものは発行されない。

実際の利用については、希望する本を書庫のどこかで（もちろんABC順に配列）自ら探し出した時は、その図書の名前・巻・年号をカウンターで所定の借り出し用紙に記入して、所属部署と署名をすることでチェックされる事なく借り出せる。返却は該当する図書をカウンターの上に放置するだけでよい。次に、目的とする図書を自分で探し出せない時は、カウンターにいる職員に該当する本を告げるとその職員が探し出し持ってくる。前述のように書庫配置が複雑であるためにこのような取扱いにしているのかも知れない。カウンターに職員がいない時は、見たい図書の年号等を適当にメモで残しておけば、後に電話なり学内郵便で知らせてくれる。日本人から見ればこの制度は、余りにもルーズな管理かも知れない。しかし利用する者にはこれほど有難い制度はない。もちろんこの制度で、年間に何冊かの図書は不明になる。不明図書の探索で一度教授が教室員全員に家を持ち帰っていないかを尋ねていた。このいい加減な制度はあくまでも図書を紳士的に利用することを目的とし、それに自負さえ感じているのは、英国に入国を認められるいかなる国民にも英国国民と同じ医療制度を無料で提供する政策を堅持する大英帝国の自負と一脈通じるかも知れない。

次に、外来者に対する制度である。学内の職員の紹介があれば、その場で図書を利用することが出来る。その時はカードを発行され、その後このカードにより何時でも利用することが出来る。図書館内に有料のコピー機が備えられ、テレホンカードの様なカード自動発行機にてそれを入手し自由にコピーを取ることができる。この制度はクイーン・メリー大学で採用されている。入館する人はターンstuhl（回転式改札口）を通ることにより入館数と検閲の両者を受ける。同様な制度で簡単に国会図書館を利用することが出来るそうだが、私はそれを利用したことはないので詳細を知らない。

この様に、ロンドン大学の図書館には利用する側の信頼に基づく簡素な手続きと便利さがある。職員数と予算の合理化、日本人的個人主義、与えられた物資（自分の物でない）を利用するだけ教育された現代の日本人図書館利用者と図書館管理者が共に考える事ではないだろうか。読者の図書館歴は？

（医学部栄養衛生学教授）

# 『“LIBRARY”』

加守田 貴 士

大学生になるまで書物とほとんど縁がなく、今、書物を読むことによりかなり苦労しています。簡単な文章なら読むことができますが、少し難しい文章になるといやになります。だからレポートの作成のために書物を読んだり、試験勉強をするのも苦労しています。

大学生になって、読解力をつけるために身近な雑誌・新聞を読むべく図書館に行くことになりました。初めのうちは文章をみただけで1種の拒絶反応がありました。雑誌を読むのにゆったりとソファに座れるし、新聞・雑誌が豊富にあるので様々な知識を得ることができます。さらに友人との話題を得ることができるので、今では講義の空き時間によく利用しています。

図書館を利用するうちに様々なことに気付きました。まず、書物が豊富にあるということです。レポートの作成、旅行の計画を立てるのに十分図書館を利用しています。そして書物が豊富にあり、どの本をどのように活用すべきかよく迷います。しかし、こういう迷いを案外楽しんでます。

次にコミュニケーションの場であるということです。試験勉強をしていて友人と会い、互いに情報交換をしたり、読みたい書物を探していて偶然、別の自分の好きな本を見つけるなど、人と人、人と書物のコミュニケーションが生まれます。

上に述べた以外にも図書館には様々な機能があると思います。しかし、それは皆さんが利用するうちにふと気付くものだと思います。利用目的は試験勉強、休息など他人の迷惑にならないかぎり何でもいいのです。そのうちに様々な利用価値に気付くものだと思います。

図書館でじっくりレポートを作成したり、試験勉強をしていて疲れた時、窓から外を眺めると手前には助任川が見え、向こうには眉山が見えていい眺めです。そして、下宿に帰る時これだけやったという充実感で気持ちよく帰宅できます。

今は季節が秋。読書をするには絶好の季節です。図書館を利用するのは読書にかぎらないけれど、自分の人生を変えるような書物を求めて、またその他の様々な出会いを求めて、今後も図書館を利用したいと思います。  
(総合科学部3年)

# 『私の薦める一冊の本(教官から)』

村 上 光太郎

人間が生活すればそこには薬が生まれる。いや、動物が生存すれば薬が生まれると言う方がより現実的である。どんな未開の民族にも薬は存在する。どんな動物も使用している薬物がある。ところで現在使用されている薬の中には偶然に発見されたもの、古典的理論によって考え出されたもの(同生薬、同色生薬、同効生薬などの理論)、動物の使用していた薬を手本にして使用するようになった物などがある。しかし、そうして得られた薬も正しく伝承されなければ意味はないが、その伝承の形式はいろいろある。日本の各地の民間薬調査をしたり、外国の民間薬を調べていると、薬の伝承がただ単に薬の範中にとどまらず、人間との関わり合いとして、その民族、その地方を特徴できる習慣、風習、ことわざ、宗教行事、生活様式などの中に入り、民族や地方の関係を知る手がかりを与えてくれる。一方見方を変え、反対にそれらを調べることにより薬がより明確となる事もある。また起源が不明の薬でも、それらが宗教的に神聖な物として各民族に伝わっていると、そ



れを詳しく調べることにより、解明出来る事もある。いや更にそれらを調べることにより忘れられている薬が見つかる事もある。例えば、仏事に使うシキミや蓮、神事のサカキ、端午の節句のショウブ湯やお祝い時の赤飯とそれを重箱にいれたときのナンテン、料理のワサビや刺身のツマや湯豆腐のショウガなど私達の身の回りに多くの薬がある。

そういう意味で、T. C. マジュプリア著、西岡直樹訳（八坂書房出版、定価 3,000 円消費税込み）の「ネパール・インドの聖なる植物」は非常に興味深い。本書は一般向けに出版されている書物であるが、そうとすれば少し難解な気もする。著者がまえがきで述べているように「寺院や僧院に草花が描かれているのを見て、何が植物と信仰を結び付けているのか、その納得のいく説明を引き出してみようという興味と好奇心から、調査に熱が入った」と述べている様に、最初は小さな「なぜ」が出発であった。また「神話や伝説は宗教の教理に従うように単純に解いている。良くできた神話はその科学的な裏付けをもっている。植物の持つ多方面にわたる医薬的特性が病気の苦しみから我々を解き放ち、助けてきたのだが、そうした植物の持つ特性が我々の心の中に植物に対する崇拜の念を起こさせ、神格化させて来たのであり、それが現代もおお衰えることなく続いている医学的価値のある有益な草や木は必然的に、宗教的な神話や伝説と係わり合いを持たされるようになったのである。」と結論付け、その事実を本文に記載している。本書をただ単に神話の類として読み流すのもよいが、各植物をより深く知る手助けとして、また植物を通して、ネパールやインドの人々の考え方の一つを垣間見るのも面白いのではないか。（薬学部生薬学助手）



## 『一冊の本「自然科学と人間教育」(教官から)』

山下 泰子

この本の中に物理学や化学の数式が出て来るかと思ったら、 $s = 1/2gt^2$  すら見当たらない。しかし、リット著『自然科学と人間教育』Naturwissenschaft und Menschenbildung (1952) は、数年前私が目にした時、「ハッ」とする新鮮な印象を与えてくれた。学生時代、科学・哲学に興味を持っていた私は、それ以来ある思いに取り憑かれていたからである。それは、20世紀に生きる人間(私)が300年前に書かれたニュートンの『プリンキピア』の一端も理解できずに人生を終えるのかという惨澹たる思いである。一般に理系の人間は、文学や哲学に慣れ親しむことができるのに、文系の人間は、自然科学の書物を敬遠しがちである。ますます科学技術が現代社会の中に浸透して行くのに、重要なポストにいる人間が門外漢だからと言って決断を専門家に任せきりでは困るのである。これは教育の失策であると言えないだろうか。この本は、そうした教育に携わる者の憂鬱を取り除いてくれるのではないかという期待を抱かせた。

勿論、この本は科学教育礼賛の立場で書かれたのではない。ヨーロッパでは、既に18世紀から

科学に対する不審を表明する思想家達がいた。リットは、特にゲーテのニュートンに対する抵抗の正しい意味を洞察して、自然科学的思考の本質や妥当性と同時にその限界を指摘している。古典物理学の因果律の原理は相補性のそれにとって代られたが、自然科学の方法論はその権能を拡大した。それは、人間の身体、心や社会の諸経過まで数量的関係に還元してしまう程である。この「世界の事象化」は、精密科学の凱進行進とも言えるのだが、それが促進される理由は、この関係が技術に実践的な目的実現のための「行為の規則」を与えることにある。その場合リットの洞察は、「人間の感性的な知覚に与えられる自然」から科学的に見られた自然、即ち「数学的關係の抽象的構造」への移行に向けられる。自然科学が成立するためには、「直接的な世界印象の徹底的な改造」が必要である。だがその時人間は、本来パートナーである自然が与えた心情諸能力を抑圧し、自然を「主観－客観の対立」において観察することになる。実験は仮説の証明という理論的な意図において行われるのであるが、それは同時に仮説に予言された成果に導く行為として確認される。リットは、このことについて端的に「実験は理論的に先取りされた技術である」と述べている。確かに、人間が個の有限性を越えて宇宙との関係を築くことができたのは、人間が自然に科学の図式を押し付けたからではなく、自然が人間の問いかけに応じたからである。この意味において、彼は科学的思考を人間性の発展と見なしている。けれども人間が科学の方法によって自己の内部に生じた心的変化に気付かずに、非及び前科学的な自然の受容を否定したり、過小評価したりするのは、誤謬であろう。人間は、世界の理論的開示と実践的支配に我を忘れて没頭し、それに隷属している。この「事象への意志」を克服するために、彼は科学から学理論的な反省——人間の自己熟慮——への上昇が必要であると主張する。科学の方法は、この「視の転換」を遂行することができない。

リットは、科学者もゲーテの「自然の直観」と同様の前科学的な感受性を持つこと、即ち人間の全体性における「世界の印象から事象の連関を引き出す」ことを結論としている。専門科学に限定された「事象への偏向」から人間の主権を取り戻すために、彼の洞察は諸科学が如何に専門的に分化し、また関連して発展しているのかを学理論的に反省する問題を教育に課していると言えるだろう。

(総合科学部教育学助教授)



## 『私 の 一 冊 (学生から)』

横 田 志 津 子

キンモクセイ  
冷えた空気に金木犀の香りが漂う秋である。普段は本など手にとらない理系の私だが、そんな自分もふと読書に誘われてしまう夜長である。今宵の友はトム・マコックレンである。彼の著書には白ギツネの谷の物語シリーズがあるのだが御存知の方もおられると思う。今回紹介したいのはその第三弾「走れすばやく走れ自由に(岡村雅子訳)」である。

主人公は白ギツネ谷に住むギツネ達、特に子ギツネ達である。春、巣穴から出てきた子ギツネは親という盾の下で安全に快適に生きているのだが、彼らにとって春の訪れは一人立ちの出發でもある。自分で餌を取り、敵から身を守り、自然と共存していかなければならない。何も知らない子ギツネ

達は見たり聞いたり嗅いだりと五感の全てを使って状況を感じることを知り、自ら考えることの大切さを人生の先輩から学び、そして体得していく。そんな子ギツネたちに心から頑張れと声援を贈っている自分と、彼等のうちの一頭になりきり共に草原を駆け抜ける自分が同じ自分の中に共存していることに気が付く。私もまた、いつしか親の元を離れ一人生きて行こうと一步を踏み出したところだからであろうか。生きていくということは、平らな道ばかりではない。自分の生まれた土地を離れ、愛する家族、友人と別れ一人進む。行く先にはどんな困難が待ち受けているやも知れない。しかし、自分を信じて進まねばならないのはキツネも私達も同じである。この作品の最後の章で二頭の子ギツネも故郷を背にする。涙が出て仕方がないシーンだが、その涙をめぐって私もまた旅に出ねばならない一人なのだと感じるシーンでもある。旅立つ二頭に「走れ、すばやく、走れ自由に」と声援を贈りつつ自らもしっかり歩いて行こう。どうやら今年は少しばかり感傷の秋でもあるようだ。金木犀の風の中では秋の虫の音が聞こえている。 (工学部化学応用工学科1年)

## 『私の図書館の利用方法』

岸 和 弘

私は普段図書館をあまり利用しない、と言ったら、なぜこの文章を書いているのか？と怒られそうだが、断っておくと、普段というのは学校の授業のあるときである。では、いつ利用するのか？と言えば、休暇中である。私の自宅と附属図書館が近いこともあって、休暇中となると毎日のように通っている。当然図書館ですることとなると勉強である。学校の授業のあるときはどうしても、復習や試験勉強に追い立てられる。休暇中は自分のしたかった分野や突きつめたいところを勉強したり、読みたかった本を読んだりするのに絶好の機会である。ただ私は性格的に怠惰であるので、家にいるとどうしても、テレビのスイッチをひねったり、ベッドで寝ころんだりしてしまう。自分に重々しい雰囲気を与えることによって、自分のやる気をわき立てようというわけである。

以前、友人数名とレポートを書く上での調べものがあったので、図書館を利用した。そのとき、レポートについて議論を始めたため、周囲の雰囲気気を気にせず、やや大きな声で騒ぎ立ててしまった。すると、図書館の人がやってきて、「周りの人に迷惑かけるから、静かにして下さい。」と注意された。私はこれによって、反省させられたと同時に、感心した。というのも、図書館の人たちが“図書館”という権威を守ろうとしている気概が感じられたからだ。少し大げさかな。。。。。

とりあえず、こういう人たちに守られて、抜群の環境で利用させてもらっている。これからは、図書館の本を最大限に利用することを目標としたい。 (医学部医学科専門課程1年)



# 『ニューメディア私の利用法』

—使えて使えなくて—

山田仁子

便利そうで便利じゃない，使えそうで使いこなせない。もっとわがまま聞いて欲しい。／今夏初めてCD-ROMなるものを触ってみた私の正直な感想です。

CD-ROMとは compact disc read-only memory の略。見かけは音楽を聞くCDと同じ。出てくるものが音楽ではなく，コンピューター画面上の字や絵の情報なわけです。（もっともコンピューターにスピーカーを付けければ鳥の声などの音も出せます。残念ながら本学図書館ではまだですが）

今回私が使ったのは「広辞苑」CD-ROM版。語の意味，用例を調べるのも，必要な部分を印刷するのもボタン1つ。これなら全20巻のOED（英語の辞書）だって，百科辞典だって重い目に遭わずにラクラク調べられるし，メモしておくのも簡単。CD-ROMってすごい。／と思いつり期待したのですが……。

しかし，もっと他のことをしようとして，私はハタと悩んでしまったのです。そもそも今回私がCD-ROMを使おうと思いついたのは，私が今，研究対象としている“五感”にまつわる語を検索したかったからでした。でも，“味”をキーワードに検索しても，一度に検索できる語数に制限があり，全部は出してくれません。品詞の種類など語の文法的情報が入れてないので，語の分類も不可能です。やっとならフロッピーに落とした情報も，機種異なるコンピューターで使おうとすると，また一苦勞です。コンピューターに詳しい図書館の方や同僚の先生がたの助けがなかったら，途中で投げ出していたことでしょう。

もっと自由に遊べるよう，検索機能が充実しソフトの種類も増えれば，CD-ROMの利用価値はグンと高まり，いずれはみんなの，特に研究者の必需品となるのではないのでしょうか。私の研究ももっと進むんじゃないかとCD-ROMに秘かに期待を寄せています。（教養部英語助教授）



# 『21世紀へ向けての図書館整備について一言』

多木敏彦

本来大学の図書館は、学習図書館の性格と研究図書館の性格を持っているが、常三島地区の本館ではどちらかと言うと、学習図書館の性格が強くて傾向にある。しかしながら、常三島地区でも、工学部には大学院博士課程が出来、総合科学部でも大学院修士課程を、また工業短期大学の改組によって夜間主コースの検討も始まっている。さらに開かれた大学の図書館として考えると、本館はもっと研究用図書館の性格を強めてもいいのではないだろうか。

学生がなぜ図書館を利用しないのであるかという原因の一つには、教科書的な図書や参考書の類が多く、少し詳しく調べようとすると適切な図書や参考書の類がないということではないだろうか？

さらに、学術雑誌の類はその殆どが各教官の研究室にあって、簡単には利用できないシステムになっていることが大学院生・教官の利用が蔵本地区に比べて非常に少ない原因ではないだろうか？

図書と言うと、長い間、「印刷された物」をさすような傾向が強くて出ている。しかし最近ではコンピューターの小型化などによって、二次資料がDisketteやCD-ROMによって提供されるものが増加する傾向にある。特に、Current Contentsなどは多くの分野で、今迄の印刷物一冊子体からDiskettタイプの物に変わりつつある傾向であるにもかかわらず、常三島地区ではそのようなものがどれだけ整備されているであろうか？

現状では、各教官が自分が必要とする分野のCurrent Contentsを購入して狭い範囲で利用していると言うのが実体ではなかろうか？ 現在、Current ContentsはIBM PC(XT, AT, PS/2または100%互換機)5.25"(2HD), 3.5"(2DD); AppleMacintosh(MAC Plus, SEとII)3.5"(2DD)及びNEC9800シリーズ5.25"(2HD), 3.5"(2DD)の形で販売されている。必要な分野のCurrent Contentsを図書館で購入し、管理し、必要なときに教官や学生が利用できるようにするのが本来の姿ではないだろうか？

地方大学では、予算の関係もあり各分野で多くの学術用雑誌を購入することが不可能であるから、Current Contentsのアブストラクト付きのDisketteタイプを図書館で購入し、パーソナルコンピューターを1台購入して記憶容量の大きな光磁気Diskをつけて、その上にCurrent Contentsの「Life Sciences」、「Engineering, Technology & Applied Sciences」、「Physical, Chemical and Earth Sciences」等のDisketteをコピーしておいて図書館が開館中ならいつでも誰でも利用できるようにすると、図書館の利用度も上がるし、図書館への関心が深まるであろう。

Current Contentsを図書館で購入して利用する場合には、利用者が絶対直接OriginalのDisketteに触れられないようにしておかないと事故のもとである。

過去に4年間、またここ2年間、図書館運営委員をして感じたことについて、色々取り留めのない文章を書いてきましたが、お気に障る点もあるかとは思いますが、これを期に図書館に少しでも関心をもってもらえれば幸いです。

(工業短期大学部物理学教授)



## 【図書館情報】

# 『附属図書館の新しいサービスについて』

情報化社会とよばれて久しい昨今ですが、情報を提供することが任務の図書館でも時代の流れに対応した新しい形態のサービスの展開を図りつつあります。

特に変化の激しいのは従来の印刷媒体の提供に加えて、パソコンなどのOA機器を使った電子媒体による情報の提供というスタイルが拡大しつつあることです。

図書館では現在、OPACとCD-ROMという形で行っているサービスがこれにあたります。OPAC(ONLINE PUBLIC ACCESS CATALOGUE)は、電算機を利用した蔵書検索システムです。

今までの冊子やカードなどの目録による所蔵検索に代わるものとして、'90年2月に目録業務が電算化されたことを契機に、そのデータを編集して学内情報処理センターの電算機上にデータベースを構築しました。

そして、TUISTという名称のもとに、11月に図書館設置端末でのサービス開始を経て、今年4月からは学内のどの端末からも利用可能になっています。

まだまだシンプルなものですが、データの蓄積と機能の強化を図ることにより、より有効的で使いやすい検索手段としていきたいと考えています。

CD-ROMは、簡単にいえばCDの中に大容量のデータ(例えば一年分の新聞記事)が納められており、パソコン等を使って情報検索するものです。

本館ではこの4月にCD-ROM用のパソコンを導入し現在では、

電子広辞苑・模範小六法・CD-WORD が利用できます。

また新たに、

CD-HIASK(朝日新聞記事)・学術雑誌総合目録CD-ROM版

CD-現代日本科学技術者執筆大事典・ERIC(教育学関係データベース)

などの導入を計画しています。

蔵本分館では、平成2年10月にMEDLINEのサービスを開始して、商業ベースによるDIALOG等のオンライン検索サービスで校費が使えない院生・学生の利用も可能になりました。研究者にとっても最新情報をのぞけばCD-ROM版を使うことにより、情報検索に費やしていた費用を別の方面に使えるなどのメリットもあり、高いレンタル料を十分にペイできるだけの利用がなされています。

このような状況なので条件を整えばもう1台のパソコンを導入し医学中央雑誌などの他のCD-ROM版データベースの提供もすることを現在考慮中です。

またこれは直接的な図書館のサービスではありませんが、'92年1月に学内の情報処理センターが学情ネットワークに接続することになり、学術情報センターのNACSIS-IRなど学外の機関が提供している各種データベースの検索や、同じく学術情報センターが実施している電子メールサービスが今までよりもずっと使い安い環境になります。

情報を獲得する手段としての電子媒体の利用は、学習・研究面だけでなく広く社会一般でも浸透していく傾向にあり、大学を離れても必要とする状況は増えていきます。

これらの使い方は、多少の差はあれそれほど難しいものではなく、自動車の運転と同じようにいけば慣れの問題です。

図書館に設置してあるOPAC用端末やCD-ROM用パソコンは自由に使えます。

この機会を利用して、必要性からだけでなく、マニュアルをみながら、ゲーム感覚で操作方法を“攻略”するという使い方も将来を考えれば十分に意義のあることなので積極的に利用してください。

(情報サービス課学術情報係 渡辺 章夫)

## 【参考資料紹介】

# 『学術雑誌総合目録』

図書館には、書誌、目録、索引、抄録誌、辞典、便覧、年鑑など、二次資料が多く所蔵されています。これらは、図書館利用者にとって、重要なツールであります。しかし、利用者が、これらのツールに精通し、使いこなすには、大変困難であろうと思われます。

今度、館報の場をおかりして、これらのツールを紹介することにします。

学術研究の多様化と研究者数の増大は、情報量の多様化と増大を及ぼし、その結果として、学術雑誌数等の増加として特徴づけられています。申し上げるまでもありませんが、一つの機関において、研究者等の学術文献を満たすことは、不可能であります。我が大学においても、学外へ雑誌論文を中心として年間約4,600件の学術文献の複写を依頼しております。これらの雑誌学術文献の所蔵先調査のツールとして、次のものがあります。

1 学術雑誌総合目録 欧文編 1988年版

2 学術雑誌総合目録 和文編 1985年版

この目録は、学術情報センター・文部省学術国際局編で、その収録対象機関は我が国の国立大学・公立大学・私立大学・国立大学共同利用機関・各省庁所轄研究機関・地方公共団体・公社・法人・学協会等の機関です。収録雑誌数は、それぞれ、96,091誌、38,076誌です。掲載事項は、誌名・団体名補記・出版地・創刊年・書誌的注記・所蔵機関名および箇所名・所蔵データ等です。

3 医学雑誌総合目録 外国雑誌編(第7版)

4 医学雑誌総合目録 国内雑誌編(第7版)

この目録は、日本医学図書館協会加盟館の機関が所蔵する医学・歯学・薬学およびその関連する領域の逐次刊行物を収録しています。収録雑誌数は、それぞれ、約17,000誌、約6,700誌です。掲載事項は、誌名・発行地・注記・所蔵館名・所蔵巻等です。

5 現行医学雑誌所在目録 1991年版

この目録は、毎年刊行され、日本医学図書館協会加盟館の機関が所蔵する医学・歯学・薬学およびその関連する領域の逐次刊行物を収録しています。所蔵データが新しいので、新刊雑誌の所蔵を知るのに役立ちます。掲載事項は、誌名・出版地・受入館番号等です。また、未収録リスト・誌名変更、休・廃刊誌リストがあり便利です。

6 外国雑誌現行受入目録(1986年版)

7 外国雑誌センター館 新規収集リスト(1987/1988年)

この目録は、我が国に欠落している外国雑誌を中心に分担収集する外国雑誌センター館が収集している外国雑誌の所蔵目録です。それぞれ、17,106誌、3,964誌を収録しています。掲載事項は、誌名・出版地・受入館略名等です。

以上、主たる学術雑誌の総合目録の紹介をしました。これらの総合目録は所蔵先を調査することを主な目的としますが、使い次第では雑誌の書誌事項調査等様々なデータを我々に与えてくれるものであります。なお、雑誌目録として他に、国立国会図書館所蔵の外国逐次刊行物目録および国内逐次刊行物目録、日本科学技術情報センターのJICST資料所蔵目録、The British Libraryの所蔵目録であるCurrent serials receivedも本学図書館に所蔵しています。これを期に、一度、参考文献・引用文献など確認調査をされてみてはいかがでしょうか。

(情報サービス課学術情報係 庫元 孝文)

# 『 会 議 』

## 附属図書館運営委員会

### 第1回

- 日 時 平成3年4月22日(月) 15時10分から  
 場 所 附属図書館会議室  
 議 題 1 平成4年度概算要求事項(案)について  
 2 平成3年度事業計画及び将来計画について  
 3 附属図書館長候補者の選考について

### 第2回

- 日 時 平成3年5月20日(月) 15時10分から  
 場 所 附属図書館会議室  
 議 題 1 平成3年度附属図書館経費所要額(案)について

### 第3回

- 日 時 平成3年6月10日(月) 15時10分から  
 場 所 附属図書館会議室  
 議 題 1 附属図書館長候補者の選出について

### 第4回

- 日 時 平成3年7月1日(月) 15時10分から  
 場 所 附属図書館会議室  
 議 題 1 分館長候補者の選出について  
 2 平成3年度学生用図書購入費配分(案)について  
 3 平成3年度参考図書購入費配分(案)について  
 4 平成3年度教養図書購入費配分(案)について

### 第5回

- 日 時 平成3年7月22日(月) 15時10分から  
 場 所 附属図書館会議室  
 議 題 1 週40時間勤務制への対応について

## 本学教官著作寄贈図書(平成3年4月～9月受入分)

著 者	書 名	出版者(社)	寄 贈 者	配置箇所
熊谷 正憲	N. ハルトマン自由論の研究	溪 水 社	熊谷 正憲	本 館
ヘルムート・アッカー編著 堀 均 他訳	低酸素の分子生理学	シュプリンガー・ フェアラーク東京	堀 均	本 館
Liang-Shih Fan & Katsumi Tsuchiya	Bubble Wake Dynamics in Liquids and Liquid-Solid Suspensions.	Butterworth- Heinemann	土屋 活美	本 館
定井 喜明	定井喜明先生 退官記念集	退官記念事業会	定井 喜明	本 館
竹治 貞夫	麗澤雑詠集 古稀記念		竹治 貞夫	本 館
東 南光	第六回 東南光書作展作品集		東 國恵	本 館



# 『人事往来』

## （退職）

河 口 春 己 事務長 平成 3. 3. 31  
加 川 徳 子 整理係 ”

## （辞職）

高 田 佳 枝 分館情報サービス係 平成 3. 7. 31  
鎌 野 規佐子 情報サービス係 平成 3. 8. 31

## （採用）

日 高 奈三江 整理係 平成 3. 4. 1  
廣 田 ますみ 分館情報サービス係 平成 3. 8. 1  
山 田 ひとみ 分館情報サービス係 ”  
高 畠 初 枝 雑誌情報係 平成 3. 8. 6  
蔵 本 真由美 情報サービス係 ”

## （昇任）

高 内 さよ子 総務主任（総務係） 平成 3. 4. 1  
杉 尾 勝 茂 事務部長 平成 3. 4. 12  
（前 東京工業大学附属図書館情報管理課長）  
寺 井 重 雄 情報管理課長 ”  
（前 徳島大学庶務部庶務課課長補佐）  
藤 森 末 雄 情報サービス課長 ”  
（前 筑波大学図書館部情報管理課課長補佐）

## （配置換）

岸 本 博 経理部経理課給与経理係 平成 3. 4. 1  
（前 総務係）  
阿 部 文 代 総合科学部会計係 平成 3. 8. 1  
（前 分館情報サービス係）

## （勤務換）

杉 友 友 子 整理係 平成 3. 4. 1  
（前 受入係）  
立 花 繁 総務係 ”  
（前 受入係）  
鎌 田 智 美 受入係 ”  
（前 蔵本分館運用係）  
鎌 野 規佐子 運用係 ”  
（前 受入係）  
高 田 佳 枝 蔵本分館運用係 ”  
（前 運用係）  
庫 元 孝 文 学術情報係 平成 3. 4. 12  
（前 運用係）  
渡 邊 章 夫 学術情報係 ”  
（前 総務係）  
立 花 繁 学術情報係 ”  
（前 総務係）

# 『1992年版新規購読及び購読中止学術雑誌等一覧』

## 1992年版新規購読雑誌

1. Acta Arithmetica. (POL)	養 (数 学)
2. Archives de Philosophie. (FRA)	養 (哲 学)
3. Automotive Engineering. (USA)	工 (機D-3)
4. Bulletin de la Societe Francaise de Philosophie. (FRA)	養 (哲 学)
5. Comparative Political Studies. (USA)	養 (政 治)
6. Comparative Politics. (USA)	養 (政 治)
7. Earthquake Spectra. (USA)	工 (建A-3)
8. Economic Policy. (GBR)	養 (政 治)
9. Electromyography and Clinical Neurophysiology. (BEL)	養 (保 体)
10. Etudes Philosophiques. (FRA)	養 (哲 学)
11. European Industrial Relations Review. (GBR)	養 (政 治)
12. European Journal of Political Research. (NLD)	養 (政 治)
13. Fuzzy Sets & Systems. (NLD)	工 (知B-2)
14. Giornale di Diritto del Lavoro di Relazioni Industriali. (ITA)	養 (政 治)
15. Geschichte und Gessellschaft :Zeitschrift fur Historische Sozialwissenschaft. (DEU)	養 (社 会)
16. IEEE Magazine :Microwave and Guided Wave Letters. (USA)	短 (電氣共)
17. Index to Legal Periodicals. (USA)	総 (法 律)
18. Information Sciences. (USA)	工 (知B-2)
19. International Journal of Neural Networks. (GBR)	工 (知B-3)
20. International Review for the Sociology of Sport. (DEU)	総 (体 育)
21. International Organization. (USA)	養 (政 治)
22. Inverse Problems. (GBR)	養 (数 学)
23. Journal of Biological Chemistry. (USA)	工 (生物共)
24. Journal of Nonlinear Optics. (USA)	工 (電A-3)
25. Journal of Structural Geology. (GBR)	総 (総合物)
26. Kunst und Antiquiteten. (DEU)	総 (美 術)
27. Linguistics & Philosophy. (NLD)	養 (英 語)
28. Marxism Today. (GBR)	養 (政 治)
29. Middle East Journal. (USA)	養 (経 済)
30. Le Monde - Selection Hebdomadaire. (FRA)	養 (仏 語)
31. National Geographic. (USA)	図 書 館
32. New Left Review. (GBR)	養 (政 治)
33. Newsweek International. (USA)	図 書 館
34. OEures et Critique. (DEU)	養 (仏 語)
35. Philosophie. (FRA)	養 (哲 学)
36. Politics & Society. (USA)	養 (政 治)
37. Prospettiva Sindacale. (ITA)	養 (政 治)
38. Revue Internationale de Philosophie. (FRA)	養 (哲 学)
39. Revue de Metaphisique et de Morale. (FRA)	養 (哲 学)
40. Revue Philosophique de Louvain. (FRA)	養 (哲 学)
41. Rinascita. (ITA)	養 (政 治)
42. Scientific American. (USA)	図 書 館
43. Sprach-Illustrierte. (DEU)	総 (独 文)

44. Tectonophysics. (NLD)	総 (総合物)
45. Time. The weekly News Magazine. :Asian Edition. (JPN)	図 書 館
46. West European Politics. (GBR)	養 (政 治)
47. U. S. News & World Report. (USA)	図 書 館

(内国の部)

1. アジア経済資料月報	養 (経 済)
1. アスキー	図 書 館
2. 分析化学	工 (化応共)
3. Cマガジン	短 (電気1)
4. 地下水学会誌	工 (建C-3)
4. 長銀調査月報	養 (経 済)
5. 電気学会研究会資料 放電	工 (電B-3)
6. 電子情報通信学会技術研究報告 スペクトル拡散	短 (電子2)
7. 電子情報通信学会技術研究報告 光通信システム	短 (電子2)
8. 電子情報通信学会技術研究報告 無線通信システム	短 (電子2)
9. 土木学会論文集 第I部門	工 (建設共)
10. 土木学会論文集 第II部門	工 (建設共)
11. 土木学会論文集 第III部門	工 (建設共)
12. 土木学会論文集 第IV部門	工 (建設共)
12. 土木学会論文集 第V部門	工 (建設共)
12. 土木学会論文集 第VI部門	工 (建設共)
13. 学校におけるコンピュータ活用事典 追録	開 実 セ
13. 岳人	図 書 館
14. 現代化学	図 書 館, 工 (化A-2)
15. 現代教育科学	総 (総合物)
16. 行政事件裁判例集	総 (法 律)
17. 法曹時報	総 (法 律)
18. 移住研究	養 (地 理)
19. JCAジャーナル	総 (法 律)
20. 自治研究	総 (法 律)
21. 児童心理学の進歩	総 (行動科)
22. 人文科学データベース研究	養 (文 学)
23. 人工知能学会誌	工 (知情共)
24. 情報処理学会研究会誌 情報メディア	工 (知A-4)
25. 火力電子力発電	工 (機D-2)
26. 科学	養 (数 学)
27. 化学工学	工 (化応共)
28. 化学工学論文集	工 (化応共)
29. 海外移住	養 (地 理)
30. 健康と体力	総 (体 育)
31. 金融と開発	養 (経 済)
32. コーチング・クリニック	養 (保 体)
33. 興銀調査	養 (経 済)
34. 航空技術	工 (機D-2)
35. 国際経済研究	養 (経 済)

36. 国際商事法務	総 (法 律)
37. こころの科学	総 (体 育)
38. コミ・ユント	総 (行 動 科)
39. 公正取引	総 (法 律)
40. MACLIFE	工 (知A-4)
40. Mac Power	図 書 館
41. 季刊 窓	養 (政 治)
42. 民事研修	総 (法 律)
43. Motor Fan	工 (機D-3)
43. なかれ	工 (建C-3)
43. Newsweek 日本語版	図 書 館
44. 日本化学会誌	工 (化応共)
45. 日本労働協会雑誌	養 (政 治)
46. 日経ビジネス	養 (経 済)
46. 日経パソコン	図 書 館
47. オプトロニクス	工 (電A-3)
48. 応用数理	工 (基礎B)
49. 汎 PAN	工 養 (地 理)
49. Quark	図 書 館
50. ライフ・ラーニング	開 実 セ
51. 労働時報	総 (法 律)
52. 労働法律旬報	養 (政 治)
53. 産業経理	総 (産 業 経)
54. 世界政治 論評と資料	養 (経 済)
55. 石油開発時報	養 (経 済)
56. 社会教育	総 (体 育)
57. 社会老年学	総 (行 動 科)
58. 触媒	工 (化応共)
59. 省エネルギー	工 (機D-2)
60. ターボ機械	工 (機D-2)
61. トレーニング ジャーナル	総 (体 育), 養 (保 体)
62. Unix Magazine	短 (電 気 1)
63. ワールド ウォッチ 日本語版	短 (土 木 2)
64. 材料と環境	工 (化応共)

(国内欧文の部)

1. ALELE(Annual Review of English Language Edition in Japan)	養 (英 語)
2. Advances in Mathematical Sciences and Applications.	工 (基礎B)
3. Bulletin of the Chemical Society of Japan.	工 (化応共)
4. Chemistry Letters.	工 (化応共)
5. JSME International Journal. I	工 (機 械 共)
6. JSME International Journal. II	工 (機 械 共)
7. JSME International Journal. III	工 (機 械 共)
8. JSME International Journal. IV	工 (機 械 共)
9. Journal of Chemical Engineering of Japan.	工 (化応共)

# 1992年版購読中止雑誌

1. American Journal of Clinical Nutrition. (USA)	総 (保健科)
2. American Journal of Science. (USA)	総 (総合物)
3. Annals of Physics. (USA)	養 (物理)
4. Applied Linguistics. (GBR)	総 (英文)
5. Cognitive Sciesnce. (USA)	工 (知B-2)
6. Continum. (USA) 廃刊	開 実 七
7. Crystal Properties & Preparation. (USA)	工 (機C-1)
8. Convergence :An International Journal of Adult Education. (CAN)	開 実 七
9. Deutsches Verwaltungsblatt. (DEU)	総 (法 律)
10. Ecological Entomology. (GBR)	養 (生 物)
11. ELT Journal. (GBR)	総 (英 文)
12. Entscheidungen des Burdesverwaltungsgerichts. (DEU)	総 (法 律)
13. Europhysics Letters. (FRA)	総 (物質基)
14. Foreign Language Annals. (USA)	総 (英 文)
15. Forest Products Journal. (USA)	総 (産業経)
16. IRAL. (DEU)	総 (英 文)
17. Journal of Physical Education, Recreation & Dance. (USA)	総 (体 育)
18. Journal of School Health. (USA)	総 (体 育)
19. Journal of Textile Institute. (USA)	図 書 館
20. Key Engineering Materials. (USA)	工 (機C-1)
21. Language Learning. (USA)	総 (英 文)
22. Language Teaching. (GBR)	総 (英 文)
23. London Review of Books. (GBR)	養 (英 語)
24. Management Science. (USA)	工 (知b-2)
25. Muscle & Nerve. (USA)	養 (保 体)
26. Neue Zeitschrift fur Verwaltungsrecht. (DEU)	総 (法 律)
27. Newsweek. (USA)	養 (英 語)
28. Nouvo Cimento. B. (ITA)	総 (物質基)
29. Nouvo Cimento. C. (ITA)	総 (物質基)
30. Nouvo Cimento. D. (ITA)	総 (物質基)
31. Die Oeffentliche Verwaltung. (DEU)	総 (法 律)
32. Pharmacology and Toxicology. (DNK)	総 (保健科)
33. Physical Review. A :General Physics.	総 (物質基)
34. Physics Letters. A :General Physics, Atomic Physics and Solid State Physics. (NLD)	総 (物質基)
35. Physics Letters. C :Physics Reports. 総 (物質基),	養 (物 理)
36. Physiological Entomology. (GBR)	養 (生 物)
37. RELC Journal. (SIN)	総 (英 文)
38. Research Quarterly for Exercise and Sport. (USA)	総 (体 育), 養 (保 体)
39. Review of Educational Research. (USA)	共 (図 書 館)
40. Reviews of Modern Physics.	養 (物 理)
41. Rivista del Nuovo Cimento. (ITA)	総 (物質基)
42. School Science Review. (GBR)	総 (総合物)

43. Science Activities. (USA)	総 (総合物)
44. Science and Children. (USA)	総 (総合物)
45. Science Teaching. (USA)	総 (総合物)
46. Shakespare Quarterly. (USA)	養 (英語)
47. Signal Processing. (NLD)	工 (知B-3)
48. Simulation & Games. (USA)	工 (知B-2)
49. Soviet Physics-JETP (USA)	工 (電A-1)
50. Structural Engineer. Pt.A (GBR)	工 (建A-3)
51. Structural Engineer. Pt.B (GBR)	工 (建A-3)
52. Studio International. (GBR) (廃刊)	総 (美術)
53. Systems. (USA)	総 (英文)
54. TESOL Quarterly. (USA)	総 (英文)
55. Textile Horizons. (USA)	図 書 館
56. Textile Progress. (USA)	図 書 館
57. Time Literary Supplement. (GBR)	養 (英語)
58. Times. (GBR)	図 書 館
59. Transportation. (NLD)	工 (建C-1)
60. Transportation Science. (NLD)	工 (建C-1)
61. Verwaltungsarchiv. (DEU)	総 (法律)
62. Volkskunst. (DEU) 廃刊	総 (美術)
63. Wirtschaft Wissenschaft. (DEU)	養 (経 済)

(内国の部)

1. アスキー	短 (電気1)
2. Computer Today	短 (電気1)
3. 電気と管理 (休刊)	短 (電気2)
4. 電子情報通信学会技術研究報告 交換システム	工 (知A-2)
5. 英語教育	短 (英語)
6. 英語青年	養 (英語)
7. 英語展望	短 (英語)
8. エレクトロニクス	工 (電C-3)
9. English Express	養 (英語)
10. 現代社会学	養 (社会)
11. 言語	短 (英語)
12. 学校保健実践事例集 追録	図 書 館
13. 原子核研究	養 (物理)
14. 判例地方自治	総 (法律)
15. 法人税実務提要 追録	総 (産業経)
16. 北海道地理	養 (地理)
17. 翻訳の世界	短 (英語)
18. インターフェース	工 (知A-3)
19. International Nursing Review	総 (医科学)
20. 科学朝日	工 (機械共)
21. 科学史研究	総 (総合物)
22. 下級裁判所民事判例集 (休刊)	総 (法律)
23. 看護技術	総 (医科学)

24. 刑事裁判月報 (休刊)	総 (法 律)
25. 健	総 (体 育)
26. 健康教室	総 (体 育)
27. 機械設計	工 (機D-3)
28. キネマ旬報	図 書 館
29. 切抜き速報 人権と福祉編 (休刊)	開 実 セ
30. 切抜き速報 社会科版	養 (地 理)
31. 工業英語 (休刊)	短 (英 語)
32. 厚生指標	工((建C-3), 養 (社 会)
33. 公衆衛生情報	開 実 セ
34. 月刊 教育とコンピュータ (休刊)	開 実 セ
35. 救急医学	総 (医 科 学)
36. Medical Technology	開 実 セ
37. Modern Medicine	開 実 セ
38. 内燃機関	工 (機D-3)
39. 日経サイエンス	工 養 (保 体)
40. 日経サイエンス 別冊	養 (保 体)
41. 日本語学	短 (英 語)
42. 日本医事新報	短 開 実 セ
43. 脳と神経	開 養 (保 体)
44. 音楽教育 (休刊)	養 総 (音 楽)
45. パリティ	工 (電A-2)
46. RIDERS CLUB	図 書 館
47. 臨床と微生物	開 実 セ
48. サイクルスポーツ	図 書 館
49. サッカーマガジン	総 (体 育)
50. サッカーマガジン 別冊	総 (体 育)
51. 社会学評論	総 養 (社 会)
52. 社会保障研究	養 (社 会)
53. 新英語教育	養 総 (英 語)
54. 思想	養 (社 会)
55. 室内	総 (産 業 経)
56. 書品 (終刊)	総 (美 術)
57. 消費と流通 (休刊)	総 (美 術)
58. 体育スポーツ総覧 追録	総 (体 育)
59. 代謝	総 (医 科 学)
60. 飛ぶ教室	養 (英 語)
61. トランジスタ技術	開 養 (社 会)
62. 月刊 世論調査	養 (社 会)

( 国内欧文の部)

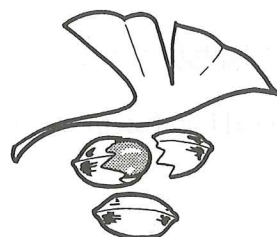
1. English Teaching Form	総 (英 文)
--------------------------	---------

# 誌 名 変 更

## 旧 誌 名

## 新 誌 名

- |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・ Computer Vision, Graphics &amp; Image Processing. →</li> <li>・ IEEE Magazine :ASSP →</li> <li>・ IEEE Transaction :Acoustics, Speech and Signal Processing. →</li> <li>・ Journal of Prestressed Concrete Institute. →</li> <li>・ Lifelong learnig :An Omnibus of Practice and Research. →</li> <li>・ Neurocomputers. →</li> <li>・ 日銀調査月報 →</li> <li>・ サイエンス →</li> <li>・ Transactions of the Institute of Electronics and Communication Engineers of Japan. Sect.E. (4分冊) →</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ CVGIP :Graphical Models and Image Processing.</li> <li>・ CVGIP :Image Understanding</li> <li>・ IEEE Magazine :Signal Processing.</li> <li>・ IEEE Transaction :Signal Processing.</li> <li>・ PCI Journal.</li> <li>・ Adult Learning.</li> <li>・ Sixth Generation Systems.</li> <li>・ 日本銀行月報</li> <li>・ 日経サイエンス</li> <li>・ IEICE Transactions on Communications.</li> <li>・ IEICE Transactions on Electronics.</li> <li>・ IEICE Transactions on Fundamentals of Electronics, Communications and Computer Sciences.</li> <li>・ IEICE Transactions on Information and Systems.</li> </ul> |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|





# 1992年備付箇所変更雑誌

1. Computational Linguistics. (USA)	短(英語) ⇒ 総(英文)
2. Computers and the Humanities. (NLD)	短(英語) ⇒ 総(英文)
3. Engineering Fracture Mechanics. (USA)	工(機A-4) ⇒ 短(生産2)
4. English Studies. (NLD)	短(英語) ⇒ 総(英文)
5. Environment and Planning. Sect.A. (GBR)	工(建C-4) ⇒ 工(建C-1)
6. Fatigue & Fracture of Engineering Materials and Structures. (GBR)	工(機A-4) ⇒ 短(生産2)
7. Journal of Regional Science. (USA)	工(建C-4) ⇒ 工(建C-1)
8. Journal of Urban Economics. (USA)	工(建C-4) ⇒ 工(建C-1)
9. Literary & Linguistic Computing. (GBR)	短(英語) ⇒ 総(英文)
10. Makromolekulare Chemie. (SCH)	工(化A-3) ⇒ 工(化A-2)
11. Makromolekulare Chemie :Macromolecular Symposia.	工(化A-3) ⇒ 工(化A-2)
12. Makromolekulare Chemie :Rapid Communications.	工(化A-3) ⇒ 工(化A-2)
13. Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America. (USA)	工(生物A) ⇒ 工(生物共)
14. Regional Science & Urban Economics. (NLD)	工(建C-4) ⇒ 工(建C-1)
15. Regional Studies. (GBR)	工(建C-4) ⇒ 工(建C-1)
16. Studies in Language. (NLD)	短(英語) ⇒ 総(英文)

## (国内欧文の部)

1. Journal of Japanese Linguistics. . . . .	短(英語) ⇒ 総(英文)
---------------------------------------------	---------------



# 『図書館(本館)の施設・設備等の利用について』

図書館の施設・設備の利用を下記のとおり改善，変更しましたので，利用されるに当たり十分留意され，積極的な活用をお待ちしております。

## 1. 蔵書の配架位置

今夏，書庫内蔵書を大幅に移動し，下図のと通りの配架構成としましたので，書庫内を検索される時は見取り図或いは書架見出しを確認の上，検索をしてください。なお，一部書庫内階層の蔵書に配架上の混乱がありますが，追って整理を行いますので円滑な利用ができるようになります。

図書館蔵書配架構成図

新館書庫・閲覧室等		書 庫	
3階	(研究雑誌閲覧室) 学術雑誌(購入及び寄贈(高利用度誌)の新着雑誌1年分) 学術雑誌(二次資料) 新聞縮刷版・大型コレクション・官報・他大 大学所蔵目録・学位論文・BLC 泉山文庫・古地図(特殊資料室)	5層	国内雑誌 (A~L)
2階	(指定図書閲覧室)  学生用指定図書・名著購読本(一部)	4層	国内雑誌 (M~Z)
1階	(集密書庫)  総記・社会科学・自然科学 工学・産業・哲学・歴史・地理 文学・文庫本・名著購読本	3層	外国雑誌 (A-JOUR. CHEM.)
		2層	外国雑誌 (JOUR. CHIN.-Z. 露文誌)
		1層	芸術・語学・新聞 郷土資料・登記省略図書 一般教養雑誌・その他

## 2. CD-ROMの設備と利用

昨年来導入を検討してまいりましたCD-ROM装置と関連ソフトを，2階一般開架図書閲覧室の前フロアに設置しました。利用できるソフトは，まだ緒についたばかりなので，利用者に対する啓蒙的な意味合い程度のものでしかありませんが，漸次質・量共に充実を図っていく予定です。なお，蔵本分館においてはMEDLINEが昨年から利用できるようになっているので，外部機関とのオンライン接続による利用の必要性が薄らいでおります。このようなデータベースは，導入による利用効果・経費等も勘案して効果的に利用されることが大事な要件となるので，本館において導入する場合も利用者からの意見を入れるなど，十分検討することが必要でしょう。

現在設備している装置とCD-ROMソフトを下記に挙げましたので、大いに利用してください。なお、ソフト等の資料は、利用の申し入れがある都度カウンターから貸し出しますので、館内に備え付けの装置を使って利用してください。また、検索方法等判らないときは、カウンター係員にお尋ねください。

- ※ CD-ROM装置 NEC PC-9801 DA  
同 ソフト ① 電子広辞苑  
② 模範六法  
③ CD Word (8カ国語電子辞書)

### 3. 文献複写

図書館に所蔵する図書資料の複写は、図書館に備え付けの複写機を使用して行うことになっています。私費払いで利用者が複写したい場合の申込手続きについて簡略に述べておきます。

貸出カウンター前にある記帳台備付申込用紙「文献複写申込書」(青色)に氏名・書名等を入力して、カウンターの係員に申し込んでください。その際、図書館複写機専用の複写カードをお渡ししますので、同フロア内の複写機を使って行ってください。生協で購入の複写カードは、図書館複写機では使用できません。料金は、平成2年度から学内者の場合、B4サイズ一枚20円です。料金払い込み後は必ず領収書を受け取ってください。なお、複写完了後は面倒ですが、開架図書はもとの配架位置に戻し、書庫内図書はカウンターに返してください。なお、校費払いは従来通りです。

※ 利用できる時間

- 平日 9:00～16:00
- 土曜日 9:00～12:30

(なお、必要な場合は利用時間の延長も可能です。)

### 4. 視聴覚資料の利用

ニューメディア資料としての視聴覚資料が毎年増加し、現在では各種資料を累計しますと、3,067点に達しています。特に近年の中で多くを占めているのは、CD・LD、ビデオテープ、カセットブック類です。

これらの資料は、館内・館外での利用ができますが、資料はすべて書庫内に管理してありますので、利用の申し出に当たり、先ず開架閲覧室前の書架に準備してある資料目録で必要な資料を検索してください。検索し、利用希望のものが見つければ、記帳台に備え付けの請求用紙に記入して、カウンター係員に請求・確認してもらってください。資料は、請求者自身で取り出すことになってるので、確認が終われば書庫内に入り資料を探してください。該当の資料がない時は、貸出等により利用されているので、係員に相談してください。

なお、資料の内貸出のできないものも多数あるので、これらの資料は館内視聴覚室で利用してください。この視聴覚室の聴取方法は、イヤホーンで聞き取る方式をとっているため、室内備付けのものか、ない場合はカウンターに予備があるので係員に請求してイヤホーンを借り出して使用してください。

※ 最近イヤホーンを手荒に扱うなど故障が多数でているので、故障が生じた時は必ずその旨申し出てください。

## 5. 大視聴覚室の利用について

9月1日から3階の視聴覚室を「大視聴覚室」と室名を定めました。このことに伴い、利用を円滑に幅広く利用者の要望に応えられるよう新規に規定を定め、運用ができるよう改めました。ここで、この室を利用する際に守っていただきたいことについて、簡略に記しておきます。

- ① 利用の希望がある場合は、必ず前もって電話等で室が空いているかどうか、確認してください。
- ② 利用予約ができたあとは、速やかに図書館に来て頂きカウンターで所定の手続きをとってください。この時、目的等の理由で利用が許可されない場合もありますので、できるだけ早く手続きをとってください。
- ③ 室内機器を利用するときは、必ず前もって操作テストと必要な器具類を整えるようにしてください。
- ④ 利用が終了したときは、電源等の始末を行い室内を元に復し、借用物品・資料・鍵等をカウンター係員に返してください。

なお、従前のビデオ装置に加え移動式液晶ビデオ装置を整備しましたので、申込の際その旨係員に教えてください。  
(情報サービス課情報サービス係)

---

## 編 集 後 記

本号から従前の編集・印刷様式を少々変えました。見やすいことを主眼に考えましたが、何分智恵のない悲しさで、思惑とはかなりかけ離れたものになりました。

今後の刊行方針としては、年2回の刊行頻度を年3回とし、できるだけ図書館からのホットな情報をお伝えしたいと考えております。

本号には、多数の方々から玉稿が寄せられました。徳島大学附属図書館報として部課制発足第1号に向け、ご協力頂きました方々に深甚の御礼を申し上げます。



---

編集委員会：委員長・後藤健次 委員・熊谷正憲，三村康男  
発行 徳島大学附属図書館

(〒770) 徳島市南常三島町2丁目1番地 徳島(0886)23-2310 内線(6111)

FAX 附属図書館(本館)(0886)55-9593 蔵本分館(0886)33-2950